

魔怪談集

保坂歩

召喚者

Lさんは同期の中でも、真面目で契約熱心な悪魔である。

召還者の人間が、魂を20年後から50年後の間に差し出すことを条件に願いを叶える、という自分流のルールを守っていた。

そのLさんが、ある人間に呼び出されたときのこと。

人間は30代の女性で、現れたLさんに向かってすぐに、自分の魂を30年後に差し出すことを約束した。

Lさんの方も問題は無いので、30年後に彼女の魂を貰い受けることにした。

女性の願いは、隣家に住む男性を自分の夫にしたい、という単純なものだった。

Lさんにとってはそれぐらい赤子の手をひねるようなものだ。

その願いは、その日の内に叶えられた。

そして30年後の再会を約束して帰ろうとしたLさんに、女性はこう言って笑った。

「またよろしくお願いします」

また、とはどういう意味だろう？ さしものLさんも混乱した。

そして、はたとLさんは気がついた。

見覚えがある。

随分前に、この女性の顔を見たことがある。

そういえば、今自分がいる屋敷にも見覚えがあるではないか。

だが、人間の寿命は悪魔と違って限りがある。

悪魔の感覚でも、随分前、と思えるほど過去に会った女性が、同じ顔と年齢というのはあり得ない。

Lさんは気になってしまい、以前にも自分を呼び出したことがあるか、と女性に尋ねた。

女性は首を横に振り「いえ、それは母が」と答えた。

女性の母親は、30数年前にLさんを呼び出していたそうだ。

そして、娘と同じように意中の男性を自分のものにしたいと願い、30年後に自分の魂を差し出すことを誓ったという。

その時の男性が、女性の父親らしい。

母親の話を聞いていた女性は、ぜひ自分も願いを叶えてもらいたい、とLさんを呼び出したのだ。

Lさんは数年前に女性の母親の魂を受け取っていたが、まさか娘にも呼ばれるとは想像してもい

なかったのだ。

自分も一人娘が欲しい、と女性は最後にまた笑った。

それから30年経った。

Lさんは、また同じ顔の女性に呼び出される気がしてならないという。

Bさんという悪魔がいた。

Bさんは二枚舌で有名で、友人に対しても虚言癖が目立ち、あまり評判の良い悪魔では無かった。

人間の間でもその二重人格ぶりが広まり、Bさんに頼ろうとする者はなかなか現れない始末。おかげでここ数十年は、退屈な日々を過ごしていたという。

ある日、そのBさんが喜色満面の笑みで友人達達の前に現れ、はしゃぎ出した。

「いいカモになりそうな人間が見つかった！」

嬉しそうに自慢している。

相手はパーカーを着た、軽そうな日本人の男で、ろくに悪魔に対する知識も無さそうな男だという。

Bさんのことだからいつもの虚言かとも思ったが、あまりの喜びように皆も祝福した。

ところが、あくる日からBさんの姿が見えなくなった。

その次の日も。その次の日も。

さらにその次の日も。

Bさんと親しかったSさんは、心配になってBさんの家に行ってみた。

散乱する家の中は相変わらずだったが、気になるものがあったという。

人間が書いた契約書らしい。書かれたのはつい最近だ。

隅にはきちんと血判が押されている。

奇妙なのは内容だ。

その契約書は、ラテン語で書かれているのだ。

悪魔との契約は本来、人間の古い言葉、ラテン語などで行われる。

だが最近は、ラテン語を扱えない人間が多い。

仕方ないので、悪魔の方で人間の言葉に合わせるのが、普通になってきていた。

それだけでも不思議なのに、そこに記された契約相手は、日本人の名前だったのだ。

Bさんの言っていた人間か？ 知識が無さそうな人間では無かったのか？

契約書が書かれた日付は、Bさんが消えた前日のものだった。

Bさんは今日も戻ってこない。

Bさんが消えてから、しばらく経ったある日のこと。

Sさんは人間に呼び出された。

大層驚いた。

相手は日本人の男だった。

薄汚れたパーカーを着ていて、年齢は二十代そこそこといったところ。

無精髭で見窄らしくて、お世辞にも知的には見えない。

何より、Bさんが言っていた人間の風貌そっくりだ。

男は、10年後に魂を差し出すことを条件に、Sさんに願い事を申し出た。

一つ、呼び出されたときはすぐに来てくれること。

一つ、嘘はつかないこと。

悪魔への願い事としては、随分大人しいものである。

怪訝に思いながらもSさんは、契約書にサインをさせた。

ラテン語だった。

Bさんの家で見たと同じ、ラテン語でサインをしている。

やはり、Bさんと最後に会ったのはこの男なのだ。

契約が終わり、男が今日はもういいと言うので、Sさんは帰ることになった。

だがSさんには、Bさんのことの他に、気になることがあった。

呼び出されたときに、この男が住む一軒家を何となく眺めてみたのだ。

外から見れば3階建ての一軒家だった。

だが。

男と自分がいた1階には、2階に上がる階段が無い。

どうやって上がるのだ？

気になったSさんは帰るフリをして、男の目を盗んで2階の窓から中を覗いてみることにした。

そこには。

部屋の壁いっぱい、ラテン語で書かれた紙がびっしりと貼られていた。

ただの紙では無い。

悪魔なら誰もが忌まわしく思う、ある教典が一枚一枚破かれて、壁紙のようにベタベタ貼りつけられている。

家具は無く殺風景で、壁の隅に大きな冷蔵庫だけが、ぽつんと奇妙に置いてある。

こんな部屋に入れられたら、ひとたまりもない。
人間ならば、窓を開けて飛び降りることも出来るだろうが……。
恐ろしくなって立ち去ろうとした。
だが、すぐにはそう出来なかった。

部屋の奥、壁ではなく天井に、血のついた爪で引っ掻いたような、文字が残されていた。

「だしてくれ、

Sさんは震え上がった。
文字はやはりラテン語で書かれていた。
人間がわざわざ天井に書いたとは思えない。
では誰が？
何のために、この階段の無い部屋には、冷蔵庫だけがあるのだ？
深く考える余裕も無く、Sさんは逃げ帰ったという。

契約書はすぐに自ら破り捨てた。

光の中で

Mさんは、人間を驚かすいたずらが大好きな悪魔だ。
獅子のような顔を持つ自分の姿を晒し、恐れおののく人間の恐怖の表情を見るのは、格別である。
。時折、驚きのあまり気を失ってしまう者がいれば、ありがたく魂もちょうだい出来る。
趣味と実益で一石二鳥だ。

その日もMさんは、夜の路地裏に現れた。
人間の姿をとって歩いていると、前から若い男性が一人歩いてくる。
後ろからは、中年の女性が一人。
いいカモだ。

まずは前から来る男性を驚かせて、そのまま振り返ってやろうと企んだ。
Mさんは低いうなり声をあげ、醜悪で凶々しい顔を、思いきりさらけ出してやった。

男性は、目を見開いて驚愕している。
その真っ青な顔色といたら、Mさんのこれまでの経験にも無いほど。
楽しくてたまらないMさんだったが、ふと気づいた。
男性の視線は、自分の顔を向いていない。

「何だあれは」
男性はつぶやきながら、Mさんの背後を、じっと見つめていた。
いや、もっと上を見上げていた。

振り向いてみた。

満天の星空。
そこに、円盤上の物体が浮遊している。
巨大だ。
巨大な円盤が、ゆらりゆらりと発光しながら飛んでいる。
こんな悪魔はいない。

円盤からは地上に向かって垂直に、スポットライトのような光が降りてきていた。
その光の中を、Mさんの背後にいたはずの中年女性が、もがきながら浮かんでいく。

これを見て男性は呆然としていたのだ。

Mさんも、呆然とした。

瞬間、強烈な光がMさんの視界を包んだ。

そのまま、ふっ、と時間が飛んだ。

気がついたとき、Mさんは悪魔本来の姿から、なぜか人間の姿に戻っていた。

いつの間にか、路上で気を失って、眠ってしまっていたようだった。

何が起きたのだろう。

Mさんと同時に、男性も気がついたようだった。

二人とも、同時に？

気絶した者同士が、同時に気がつくものだろうか？

空はすっかり白んでいる。

日付は、翌日の朝になっていた。

あの巨大な円盤は、もうどこにも見えない。

光の中でもがいていた、中年女性の姿も無い。

男性はまだ唖然としていて、周囲を伺いながら、何も無い青空を見上げてつぶやいた。

「何だったんでしょうかねえ……」

何だったんでしょうか、とMさんも頷いた。

その日はそのまま帰ったが、誰もMさんの話を信じてくれなかったという。

夢の中で

ある日Gさんは上司の悪魔に、人間の子どもとして生まれるように言われた。人間の中に混じって陰で行動を起こし、人間社会に不安を植えつけろ、ということだった。人間として生まれることには興味があったし、仕事としても重要で、実にやり甲斐がありそうだった。

二つ返事ですぐに了解した。

Gさんは日本の町で、ごく普通の新婚夫婦の赤ん坊として生まれることにした。母親として選んだ女性は、すでに妊娠している。

その母親の夢の中に現れ、醜い自分の姿を見せて苦しめる。それを、何日も続けた。この悪夢で母親の心と魂、胎児の心と魂を弱め、普通の赤ん坊として生まれるはずの胎児の体に入り込み、乗っ取るのだ。母親の胎内に入り込んだ後は、さすがのGさんと言えども外の状況を把握しきれなくなるが、問題は無かった。

やがて、出産の日が来た。母親は心身ともに弱っているはずだが、悪魔であるGさんが宿った体は、簡単には死なない。気づいたときにはGさんは、病院のベッドで母親の隣で寝かされていた。ついに人間として、この世に生まれることが出来た。故郷とは違う匂いの、清潔な空気が肺を満たす。召還され、短い時間この世界に現れるのとは違う、新鮮な喜びだった。

安心したGさんは、動きまわるのに適当な年齢に成長するまで気長に待つことにした。悠久の時を生きる悪魔にとって、時間は大して関係ない。悪夢を見せつづけたはずだったが、母親は何の疑いもせずにGさんを可愛がった。都合がいい女だ、とそのときは思ったという。

そして、5年の月日が経ったある日。そろそろ、悪魔の本領を見せていくべきか、とGさんが考えはじめたその日。突然、母親に呼び出された。大切な話がある、と母親は言う。興味が湧かないGさんだったが、母親の言葉に耳を疑った。

「今日、貴方の弟が帰ってくるのよ」

そう母親は言った。訳が分からなかった。

Gさんは双子として生まれた、と母親も、そして父親も言うのだ。

あり得ない。気づかぬわけがない。

自分が宿った胎児は、双子などでは無かった。

それは医者からしても、全く不可解なことだったらしい。

Gさんの弟は、母親の胎内に唐突に発生し、Gさんに追いつくように、急速に成長したというのだ。

だが、母親はそのような奇跡を受け入れた。

母親は妊娠中、自分が見せた悪夢以外にも、こんな夢を見ていた。

自分の子どもが成長し、汚らわしい毛むくじゃらの怪物に果敢に立ち向かい、怪物を闇の奥底に追いやってしまう。

そんな、誇らしい夢だったという。

だからこそ母親は、悪夢の恐怖に負けること無く、出産を迎えられたのだ。

.....誰が、そんな夢を見せたのか。

弟はなぜか未熟児として生まれ、体も弱く、今まで病院の施設で育てられていたという。

死亡する可能性もあったため、両親はGさんがショックを受けないように、今まで弟のことは話さずにいたらしい。

それが今はすっかり健康体になって、Gさんとの再会を望んでいると言う。

奇跡が連続で起きたかのようだ、と母親も医者も語ったそうだ。

そんな弟は、大人のようにしっかりしていて、賢く、はつらつとしていて、可愛らしく、そう、まるで。

まるで天使のようだ、と母親は言った。

今日、まだ見ぬ弟がGさんの部屋にやってくる。

悪魔写真

真夏の海水浴場での出来事。

悪魔のFさんは、人間の世界に現れるときは鮫の姿をとる。

海の中で自由に泳ぐのが好きなFさんは、人間に呼ばれない日でも、こっそりと海中散歩をするのが日課だった。

そんなFさんが、ある日人間の写真に写ってしまった。

ダイバーが魚群を撮ろうとして、Fさんを偶然撮影してしまったのである。

普段はもちろん写真になど写ることは無いのだが、その日は油断してしまっていた。

しかし、そこは鮫の姿のFさん。

ちょっと見ただけでは、写っているのが悪魔だとは気づくまい、とそうタカを括っていた。

だというのに、人間達は現像された写真を見て震え上がり、「お寺に持っていこう」などと騒ぎ、喚き散らしている。

そんな大げさな、とFさんは姿を消して、写真を見てみた。

ギョツとした。

灰暗い海の奥深くに、鮫の姿をした自分が写っている。

その自分の尾に、透き通った海草が絡みついている。

.....海草ではない！

幾重にも、細く青白い手が、自分の尾に絡みついている！

まるでFさんを、深い海底に誘うように.....

その手が何なのか。

Fさん自身もさっぱり分からないし、覚えもなかった。

ただ、その海水浴場がかつて大きな地震に襲われたときに、津波によって大勢の溺死者が出た、ということを知っていた。

人間達は結局、近所の寺に写真とフィルムを納め、焼いて供養してもらった。

気になったので、Fさんもこっそり着いていったらしい。

寺の住職が写真を見て、「この鮫は.....？」と首をかしげていたのが印象的だったという。

Fさんはそれ以来、その海水浴場には行っていない。

赤い部屋

Sの72柱の魔神の中でも、紅一点とされるGさんという女性がいた。
紅一点の文字通り、Gさんは流れるような赤く長い髪の毛を自慢にしていた。

そんなGさんは仲間内でも美人という評判で通っていたが、人間の前に姿を表すときは、醜い老婆の姿を取ることが多い。

自分の正体を見抜き、醜い外見を恐れなかった人間にのみ、未来の情報を教える。
それがGさんなりのルールだ。

ある日、Gさんは久しぶりに人間に召還された。
現れてみれば、果たしてそこは若い痩せた男の部屋。
ルール通り、醜い老婆の姿でGさんは現れた。
目の前の男は、怖がるどころかニヤニヤと薄笑みを浮かべている。

「分かったから、早く本当の姿を見せてくれ」

男はボソボソと呟いた。
なるほど、男は悪魔Gのことを充分に知った上で、呼び出したらしい。

若干気味が悪い男だと感じたが、自分が人間を不気味がってはいけない。
Gさんはルール通り、真の姿である赤い髪の美女の姿となった。

その瞬間。男は、絶叫していた。
(私の本当の姿の方に、驚いたというの?)
Gさんは奇妙に思ったが、すぐに勘違いだと気づいた。

男は喜びの余り、甲高い声を上げていたのだ。歓喜の悲鳴というヤツだ。

「赤い髪、美少女、比べてみても文句無し！」
男は大声で叫んで、部屋を見回している。

何を言ってるんだろう？ 不思議に思ったGさんは周りを眺めてみた。
男の部屋の壁は、ポスターだらけだった。

赤い髪の美少女の、アニメ調のイラストが書かれたポスター。

啞然としているGさんに、男は突然抱きついた。

そしておもむろに頬ずりをして、Gさんの赤い髪の臭いをくんと嗅ぎだした。

今度はGさんが悲鳴をあげた。

「俺だけの赤い髪、俺だけの女の子、二次元じゃない女の子」

男はぶつぶつと呟きながら、何も願いを告げようとしな

Gさんはすぐに理解した。

男が求めていたのは、Gさんが教える未来の情報ではなく……

Gさん、そのものなのだ、ということ

狂喜乱舞する男は、何を言ってもGさんの体から離れようとしな

このままここにいたら、何をされるのか？

恐ろしさのあまり、Gさんは泣きながら男を振り払い、自分のルールを無視して逃げ帰ったという。

今でもGさんは、男性に触れられると動悸が激しくなる。

悪魔のFさんのテリトリーは、空である。

太古の昔から、人間は空に憧れを抱いていた。

空が絶対的な自由の象徴であり、そこに天敵が存在しないことを知っていたからだ。

だから、人間は大空を舞う鳥を真似て飛行機を発明した。

しかし空には、Fさんがいる。

空は確かに自由であるが、同時に逃げ場が無いということを人間は忘れている。

Fさんの好物は、ジャンボジェット、つまり大型旅客機だ。

人間のフリをして乗り込み、パイロット達を眠らせて、操縦機器をほんの少し狂わせる。

それだけで、他の悪魔のやり方では到底追いつけない数の、人間の魂を手に入れられる。

その日もFさんは、旅行者の姿であるとある航空機に乗り込んだ。

Fさんが行動を起こすのは、機体が最高高度に達したときと決まっている。

恐怖も高度も、出来るだけ高い方が面白い。

真っ逆様に墜落していく機体、四方に狂う重力の、阿鼻叫喚の地獄絵図。

それは悪魔のFさんにとって、言いしれぬ絶景である。

——高度12000m。

この航空機の最高高度だ、という時に、Fさんは奇妙なものを目にした。

窓の外、航空機の羽の上で、小さな子どものような影が飛び跳ねている。

グレムリンという怪物の話をFさんは思い出した。

航空機や戦闘機などに取り付いて悪さをするという怪物だが、見たことはない。人間の作り話のはずだ。

では、あの子どもは何なのか？ 自分の同類か？

Fさんは興味を持って凝視した。

まさか、あれは。

Fさんは我が目を疑う。

その子どもの背には——白い羽が生えていた。

真っ白な羽を持つ子どもが、窓の外から中の様子を窺っている。

そして笑っている。

機内アナウンスが流れた。

「本日はご搭乗いただき、ありがとうございます。当機はこれから更に上昇致します」

これよりさらに高く？

Fさんは混乱する。

いったいこの航空機は何なのだ。

誰が操縦しているのだ。

Fさんは、周囲の乗客の様子を見てみた。

そして、間抜けなことにようやく気づいた。

乗客達が誰一人として、生きてはいないことに。

悪魔のFさんなら、すぐに気づくはずのことだった。

彼らは皆、死者だ。

死者の魂だ。

その表情は一様に安穏としていて、死を全く恐れていない。

すなわち、彼らは生前に大きな過ちを犯していない。

死者達と共に、自分はどこに向かっているのか？

Fさんは、もう一度窓の外を見た。

そこにはあるのは、航空機の羽では無かった。

巨大な、羽毛に覆われた巨大な羽が……大きく羽ばたいていた。

その羽の周囲で、あの子ども達が笑いさざめいている。

夜中だというのに、窓の外は光輝いていた。

Fさんは、自分が何に乗ってしまったのか、そしてどこに向かっていたのかを知った。

空には人間の天敵はいないが、悪魔の天敵はいる。

「天を傾け、彼は下った
密雲を足の下にして
ケルブの上に乗って彼は飛び、
風の翼の上を彼は漂った」

旧約聖書 詩篇18